

8月27日、東国原宮崎県知事は県内で発生した家畜伝染病の「口蹄疫」が終息したと宣言した。これによって、11市町村にまで及び、およそ29万頭のウシ・ブタ等が殺処分された今回の「口蹄疫」問題は、一応の終止符を打った。被害の拡大を防ぐため、当該家畜は“経済動物”の視点で殺処分され、屠殺後は食されることなく土中に埋められた。

8月19日、菅内閣は今年度予算からおおよそ5,000万円を今後の「口蹄疫」対策に充てる方針を打ち出した。政府の総合科学技術会議（菅直人議長）が科学技術振興調整費300億円の一部を対策費に充てるよう要望したことによる措置だった。具体的には、「口蹄疫」用簡易検査キットの有効性やウイルスの消毒方法に関する海外事例の研究など、“経済動物”を経済的に評価・維持するための対策費である。

しかし、私はそのような視点だけでなく、“いのち尊厳性”の視点からも研究が必要ではないかと考える。

“いのち尊厳性”の視点

生物は自身の“いのち”を維持・永らえさせるために採餌し、次世代へと“いのち”を繋ぐために繁殖する。前者は個体維持を目的とし、後者は種族維持を目的とする。いずれも食欲と性欲という生物として重要な“本能”であり、それがなければ個体や種族は維持されない。私たち人間も例外ではない。食べなければ、個体や種族を維持させることはできないのである。生きるということは、他の生物の“いのち”を取り込み、その“いのち”を自身の血や肉に変換させることである。

さらに、食べたり食べられたりするとは、“いのち”の奪い合いであり、やり取りなのである。そこに共通するのは、“いのち”の移動には決して無駄がないということである。換言すると、“いのち”は食べられることによって個体から別個体へと有機体を移動させ、繁殖によって遺伝子を新しい生命体へとバトンタッチすることである。もちろん、そこには“いのち”に対する尊厳性が前提として存在する。

生きている動植物の“いのち”を食べ、食べた“いのち”を自身の“いのち”の糧として繋ぎ活かしていくことは、食べものとして死んでいった動植物に対する礼儀なのである。また「いただきます」という食べものへの感謝と、「おいしい」というねぎらいの言葉を彼らにかけるとは、“いのち”に対する畏敬と慎みの心を醸成することにおいて大切である。

天理教の教えから口蹄疫問題を考える

「おふできき」に以下のお歌がある。

いまゝではぎょうばとゆうハマゝあれど
あとさきしれた事ハあるまい 五号1
たんへとをんかかさなりそのゆへハ
きゆばとみへるみちがあるから 八号54

また、『正文遺韻抄』（諸井政一著）の「動物の進歩に就て」にも同様の記述がある。

「生物は、みな人間に食べられて、おいしいなあといふて、喜んでもらふで、生れ変わるたび毎に、人間の方へ近うなるのやで。さうやからして、どんなものでも、おいしいへと云うて、たべてやらにやならん。なれども、牛馬と

いふたら、是れはたべるものやないで、人間からおちた、心のけがれたものやでなあ」と、御聞かせ被下しといふ。

「おふできき」と『正文遺韻抄』の両者とも、報恩感謝の道を忘れ、恩に恩を重ねると、最後には牛馬に等しい道（“畜生の世界”）に墮ちるほかはないと論じておられる。

ここでいう「牛馬に墮ちる」とは、人間のための使役用家畜である牛馬に生まれ変わることを意味し、他人の指示・命令のままに力仕事をしなければならぬ不自由な生活を余儀なくされることを意味している。ただ、ここでたとえられる「牛」は使役用家畜であって、食用のウシを指してはいない。

また、『稿本天理教教祖伝逸話篇』に以下の記述がある。

仲田、山本、高井など、お屋敷で勤めている人々が、時々、近所の小川へ行つて雑魚取りをする。そして、泥鰌、モロコ、エビなどを取つて来る。そして、それを甘煮にして教祖のお目かけると、教祖は、その中の一番大きそうなのをお取り出しになつて、子供にでも言うて聞かせるように、

「皆んなに、おいしいと言うて食べてもろうて、今度は出世しておいでや。」

と、仰せられ、……（後略）

(132 おいしいと言うて)

教祖が、ある日、飯降よしゑにお聞かせ下された。（中略）

「人間の反故を、作らんようにしてくれ。」

「菜の葉一枚でも、粗末にせぬように。」

「すたりもの身につくで。いやしいのと違う。」

(112 一に愛想)

「いただきます」という感謝の気持ちと、「おいしい」というねぎらいの言葉は、生れ変わる毎に人間の方へ出直して来るドジョウ、モロコ、エビなどへの励みになるのではないだろうか。

また、食べものは最後まで食べることが重要で、それまで捨てられていた物を敢えて食べることは、“いのち”を祖末にしない心得である。その行為は決して卑しいことではないのである。食べものすべてを美味しく食べることは、物を大切にする行為であるとともに、食べものに対する礼儀と感謝の表現なのである。それが、“いのち尊厳性”の視点なのである。

まとめ

今回のウシ・ブタ29万頭の殺処分と埋土は必要悪だったかもしれないが、その多くは加熱処理して私たち自身の血や肉に変換させることができたはずである。口蹄疫ウイルスを不活性化させ、“いのち”の有機体を加熱処理して私たちの血肉へと変換できる技術開発も可能なはずである。厳重な管理下であれば、殺処分されたウシやブタを「おいしい」と言って食べることはできたはずである。科学技術振興調整費300億円の一部を“経済動物”の視点だけでなく、“いのち尊厳性”の視点からも対策費として充てることを期待したい。

今回の「口蹄疫」は、家畜として飼育されながら感染牛となつて屠殺され、埋土される運命の“いのち”について、また生まれ変わる毎に人間に近づく生きものたちについて、改めて考えさせられる問題であった。

私は聞きたい。本当に最善を尽くしたのだろうか、と。